仮想世界「仮想オンラインゲーム」

神滅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮想世界「仮想オンラインゲーム」

【Ｎコード】
Ｎ３５２６Ｉ

【作者名】
神滅

【あらすじ】
オンラインゲーム〔仮想世界〕をやり始めた。〔ガリン〕の物語です。

第一章「ギルド」（前書き）

簡単な説明：
「」の中は通常チャット、『』の中はギルドチャット、
〇の中は説明、＞＜は囁き（二人だけのチャット）〇は名前など（人や場所など）
「」とかの左に書いてるのは発言してるキャラクターの名前です。
右に書いてる名前は囁きでの相手
例：ガリン＞＜ゼロ
この場合ガリンが発言そしてゼロが聞く側
そんな風な感じで書いてるのでそう思って読んでください＾＾；

第一章「ギルド」

第1章〔ギルド〕
ここはオンラインゲーム〔仮想世界〕の世界の物語・・・
〔仮想世界〕では敵を武器で倒しレベルをあげていくゲームだ。
ほかにも多人数で一緒に行動して狩りをすることもある。
はじめにキャラクターに名前をつけそれを自分として遊ぶ物だ。
俺が決めた名は「ガリン」。理由は特にない。
はじめに操作説明があり、ある程度の操作は覚えた。
そしてゲームは始まっていく・・・、
適当に敵を倒している俺に話しかけてくる人がいた。
ザン「こんにちは」
ガリン「何か用ですか？」
ザン「あいさつされたらあいさつを返すのが常識じゃないのかい？」
言われてみればそのとうりだ・・・
ガリン「失礼しました。こんにちは」
ザン「あらためて、こんにちは」
ガリン「そして初心者の俺になにかようですか？」
ザン「そうそう、君ギルドに興味ないかい？」
ガリン「ギルドとはなんですか？」
ザン「簡単に言えばいろんな人が集まって協力やチャットをする小さな組織だね」
ガリン「へー、そうなんですか。なぜに俺を誘うのですか？」
ザン「理由は簡単、君がギルドに入ってないからさ」
ガリン「それでも初心者を入れるより経験者を入れたほうがいいんじゃ？」
ザン「経験者は大体の人がギルドに入ってるよ、っま、入ってない人は1人がいいって人だね」
ガリン「だから初心者を入れるっというわけですか」

ザン「そうだよ、だから初心者がよく来るここで人が来るのを待ってる」
ガリン「それはご苦労様です。後、何も知らない俺でもよければ入れてもらいたい」
ザン「いいとも、それにレベル上げも手伝うし何でもきいてくれていい」
ガリン「それでどうすればギルドにはいれるんですか？」
ギルドに入るのは本当に簡単だったザンさんから招待をもらってはいっと答えるだけだった
ザン「チャットをきりかえることでギルドメンバーとどこでもチャットできるよ」
ザン『みんな、新しい仲間が増えたガリンくんだ』
ガリン『初心者ですが、よろしくお願いします』
美羽『よろしくねガリンくん』
黒猫『よろしく』
美羽『また、初心者の人を入れたんですか』
ザン『経験者は全員ギルドに入ってるだろ』
美羽『っま、それもそうですね』
ザン『それでは、ようこそギルド〔神の判断〕へ』
こうして俺はギルド〔神の判断〕に入ることになった。
第一章　完

第一章「ギルド」（後書き）

この話は自分が創造したオンラインゲームでの物語りであって、戦闘などがあるものにしたいとおもってます。
初投票なのでいろいろと読みにくいなどありますので何か良いアドバイスをください。
＞（　　）＜

第二章〔光と闇への分かれ道〕

ギルド〔神の判断〕にはいってから半月がたった。
ギルド員は俺を含めて５人
ギルドマスターであるザンさん（男）、副マスターである黒猫さん（女）、
ギルドメンバーである俺と美羽ｓ（女）とクロウさん（不明）
クロウさんという人とはチャットをしたことがまだない、ログインする時間帯が違うようだ。
ザンさんは優しい人だったあれからよくレベル上げに連れて行ってもらい
すぐにレベルが上がってきた。
黒猫さんは基本的に無口だった。
美羽さんは自分のことをみうっといい変換ミスでみはねと書いてしまう俺に何度も注意する。
美羽さんはなんだかんだ言ってもやさしい人だ。俺が困ってたときは声をかけてくれて、
よく一緒に狩りにも行くでもザンさんとは仲が悪いみたいだ・・・。
ザン『ガリンくん、今暇かい？』
美羽『今、ガリン君とデートの途中です』
ガリン『いや、ただの狩でしょ』
ザン『ならまた今度にしよう』
美羽『えー』
よくこんな会話があるからだ。
こんな会話でなぜ仲が悪くなるのだろうか・・・
そしてわからないのが
美羽＞ガリンくん＜ガリン
ガリン＞なんですか？美羽さん＜美羽
美羽＞ここのギルドマスターのザンを信頼しちゃだめだよ＜ガリン

ガリン＞なぜですか？＜美羽
美羽＞そのうちわかるときがくると思うよ＜ガリン
この言葉の意味がまだわからない。
美羽さんがいないある日・・・
ザン『ガリンくん、手伝いをちょっとやってもらえないか？』
ガリン『いいですよ』
ザンさんにはレベル上げを手伝ってもらった恩があるから断る理由がなかった。
手伝いとは簡単なことだ、ちょっと狩りでアイテムを探してザンさんに渡すだけ。
それが毎日のようになってきた・・・。
そして、ある日、事件はおきた・・・。
美羽さんがギルドを抜けたのだ・・・。
そしてザンさんに聞いたなぜ抜けたのか、あの人は抜けるはずはないと自分は思っていたからだ。
ザン『それはな、あいつが悪だからさ、あいつはお前を利用して悪事をやらせようとしてた。
だから俺がそうなる前に強制脱退で離してやったのさ』
ガリン『そんなことはない！そんなこと絶対に！』
ザン『だまされてるんだよ、お前は。絶対はこの世にない』
ガリン『俺は信じない』
そして美羽さんを俺は探した。
囁きで話しかければ良いってことに気づくのに時間がだいぶかかった。
だいぶ俺はあわててるようだ・・・。
ガリン＞美羽さん、こんにちは＜美羽
美羽＞ガリンくん、君は私とあまり深くかかわると消されるよ＜ガリン
ガリン＞そんなこと・・・。美羽さん何をやったんですか？＜美羽
美羽＞なんてザンから聞いたの？＜ガリン

俺はさっき聞いたことを話した。
美羽＞そうそういう風に聞いたの・・・＜ガリン
ガリン＞美羽さん教えてください何をしたんですか？＜美羽
美羽＞そうね、話したほうがいいね・・＜ガリン
美羽＞私はザンのやってることがおかしいから調査するためにあのギルドに入ってたの＜ガリン
ガリン＞調査って何が？＜美羽
美羽＞まだ解らないのね・・・。あの人は初心者を入れて自分のために働かせてるの。
そう今の君のようにね＜ガリン
ガリン＞え・・・何を言ってるんですか？＜美羽
美羽＞あの人は初心者を入れてレベル上げやアイテムを渡して恩をつくり、
その後自分のために働く良い奴隷を作ってたのよ＜ガリン
そんなことって・・・、だってあの人はやさしい人だったはずなのにそんなのって・・・。
美羽＞信じたくないんだろうけど真実はいつでもいいものとはかぎらないのよ。
それで私はやめるように言ったら強制脱退をくらっちゃったの＜ガリン
ガリン＞そんなことって・・・＜美羽
美羽＞どっちを信じるかは君しだいだから私は何も言わないけど、私はあのギルドがあると他にも初心者が不幸になるって思うから私はあのギルドをつぶそうと思う。
それはガリンにも手伝ってもらいたい・・・。私を信じてくれるならだけどね・・・＜ガリン
ガリン＞俺は・・・＜美羽
俺はまだどっちが真実なんてわからない・・・。
美羽＞まだ答えれないよね・・・。
どっちを選んでもいいんだよそれはガリンが決めること・・・。

でも早くつぶさないと被害者が増える・・・
答えは3日後には教えてほしい・・・＜ガリン
俺は解らないどうしてこうなったのか・・・俺はどうするべきなのか・・・
美羽＞私は3日後の午後までログインできなくなるの、
だからそれまでに考えて自分で自分の道を決めてほしいの＜ガリン
ガリン＞解りました・・・＜美羽
美羽＞じゃ、また3日後に・・・＜ガリン
俺はこの答えによってこれからこの〔仮想世界〕での生活にもかかわるものだと感じていた。
その分かれ道まで期限は後3日！
第二章〔光と闇への分かれ道〕完

第二章〔光と闇への分かれ道〕（後書き）

そろそろ戦闘などがはじまっていきます

第3章〔自分の意思の方向〕（前書き）

美羽が抜けて1日目、ガリンが進む道はザンか美羽か・・・
そして悩むガリンに声をかける人物

第3章〔自分の意思の方向〕

翌日
ガリンは迷っていた。
美羽についていくのかザンについていくのか・・・
それでも時は止まってくれない・・・
美羽の約束の日まで@2日・・・
適当に町で座り込んで悩んでると声をかけてくる人がいた。
絶「ちょっと、隣いいかな？」
珍しい座るだけなのに許可をもらうなんて・・・
ガリン「別に良いですよ」
絶「じゃ遠慮なく」
話しかけてきた絶というPCはいかにも初心者って感じだった。
絶「ここはね。俺のとっておきの場所なんでいつもここに座っているよ」
ガリン「そうですか、邪魔してますね。自分はどこでもいいので他行きます」
絶「いや、話相手いると楽しいから、そちらの迷惑じゃなかったらいてよ」
ガリン「じゃ遠慮なく・・・」
絶「ところで」
ガリン「ん？」
絶「何を悩んでるんだい？」
ガリン「そう思えます？」
ここはゲームの世界自分の表情は出ないはずだが・・・
絶「ん～、なんていうかみんなは狩りっていうのに君は暗いからね」
絶「悩みがあるなら相談してよ」
ガリンは今の状況を絶っという初心者に見える人に話した。
絶「苦しい状況だね」

ガリン「はぃ」
絶「君はどっちについても争いをすることになる」
ガリン「解ってます・・・」
絶「じゃ、俺が君に戦い方を教えてあげようか？」
ガリン「！？」
絶「どちらにいっても争いになるんだったら強くないと守りたい者を守れはしない」
ガリン「・・・」
絶「別にかまわないよ俺の言うことを聞く聞かないは君の勝手だ」
この人は何を考えてるんだ・・・。だが立ち止まっているだけじゃ進まないこの人の教えを受けてみても良いかも知れない・・・
そしてその時
ザン『なぁガリン、頼みがあるんだがいいか？』
ザンの頼みごとが始まった・・・。
ガリンは悩んだ。ザンの頼みごとをやると多分1日が終わってしまうが絶の話も悪いものじゃない・・・
絶「ガリン君、君は君が信じたい道に行けばいい。もしも、その道がないというなら自分で道を作り通っていけけばいい」
ガリン『すいません、用事あるんで今日は無理そうです＾＾；』
ガリン「はっきり言ってレベル上げは他の人にやってもらって戦い方なんて知りません。だから、教えてください戦い方を」
絶「いい答えだ」

そして俺は絶に連れて行ってもらい自分より強いレベルの狩場に来た・・・

絶＜ここからは囁きで話す＞ガリン
ガリン＜はぃ＞絶
絶＜とりあえずここのボスクラスの敵と戦って倒してみろ＞ガリン
ガリン＜そんな！無茶だ。ボスクラスって言ったら同じレベルでも

勝てる可能性は低いのに高レベルの場所で倒せるはずがない＞絶
絶＜それは戦い方しだいだ＞ガリン
そして絶が武器や防具を貸してくれた。
絶＜今のお前がギリギリ使える武器と防具だ好きに使ってくれてかまわない＞ガリン
そして狩場で敵を探すと目的の敵は見つかった

レベル５０　キングスライム
液体が固まった物体だった

絶＜これを今のお前が倒せるようになったら戦い方は身につく＞ガリン
うそだろ今の俺は４５レベルだ５レベルの差がある敵だ
そんな考えをしてるスキに敵は迫ってくる
液体を１本の触手のように伸ばし俺に攻撃してくる
この液体も敵の一部だからこれを切ればダメージを当てれる・・・
そう、考えた俺は実行する
さっき、借りた片手剣と盾を装備して触手を迎え撃つ
武器が強いのか一発で切れた。そしてキングスライムを目指して走りだす
絶＞戦場で油断するってことは死ぬってことだぞ＜ガリン
絶がそんなことといったときには俺の後ろに新たな敵が・・・
レベル５０　スライムＪ（ジュニア）がいた・・・
そして反応できずにスライムＪの攻撃は直撃する。
ガリン＞なぜだ、敵はキングスライムだけのはずなのに・・・＜絶
体制を整えてチャットをする
絶＞甘いんだよ。スライムの生命の１部である液体をきったって事はきられた部分にも生命があって、奴は攻撃すればするほど敵が増える。変わりにボス級にしては１体の能力は低い。だから全体攻撃で出てきたモンスターも一緒に倒すのが一番だ＜ガリン

説明を受けるがガリンにはまだ全体攻撃スキル（技）はない
絶＞最後のアドバイスとして現状を考えて今一番やるべきことを考えて実行しろ＜ガリン
絶のアドバイスといえるのかわからない言葉を聴きながら現状を見てみる
手元にある武器は片手剣、盾、大剣、槍そして短刀が2本すべて借りているものだ。
っと、いっても使ったことある武器は片手剣だけだ・・・。
回復アイテムは５０個、なくなること前提で突っ込んで回復しながら戦ってギリギリ、キングスライムだけは倒せるような数だった。
キングを倒しえてもＪが襲ってくる・・・。
そんなことを考えてる間にもキングとＪは近づいて攻撃をしにくる。
とりあえず、逃げながら考えなければと思って移動しようとする。
！、足が動かない・・・
よく、見てみるとキングスライムの触手が地面から俺の足に絡み付いてる。
このとき絶がいった［戦場で油断するってことは死ぬってことだぞ］って言葉が頭に出てきた・・・。
そしてキングスライムとスライムＪによって俺は殺され町に戻された・・・。

絶＞君の今の実力は損なもんだ。また挑戦するなら言ってくれどうせ俺は暇だからな＜ガリン
ガリン＞あなたは何者なんですか？＜絶
絶＞ただの絶って名前のプレイヤーだ。ただ君と違うところはレベルが２３０って事だけだよ＜ガリン
このゲームにおいてレベルの上限は２５０レベルだったその限界に近い人が目の前にいたのだった・・・。
ガリン＞借りた武具を返しますね・・・＜絶
そんな強い人がいたことに驚きながら武具を返すことを思い出した。

絶＞別に持っといて良いよ。俺にはいらない物だから＜ガリン
ガリン＞いいんですか？＜絶
絶＞別に良いから、後自分のスタイルに合った武器を取ることをお勧めする。君は自分で使いたくて片手剣と盾を持ってるようには見えないからね＜ガリン
はっきりいって驚いた。片手剣と盾の武器はザンにお勧めされたから使ってるだけで自分から使いたいと思って使ってるわけじゃなかった。
絶＞自分の理想のとおりに行けよ。ガリン、ここは仮想世界自分の思いをそのままにしなければならない場所出なければ楽しくない＜ガリン
そう言い残して絶はログアウトした。
第3章〔自分の意思の方向〕完

第3章〔自分の意思の方向〕（後書き）

更新だいぶ遅れました。
戦闘状況を考えると難しいです（簡単に書いてるくせにね・・・）
キングスライムとの決戦はまた今度にします。

第4章［自分の剣］

美羽が抜けて1日目の日ガリンが見えないとこでやつらは動いていた・・・。

何もない部屋で2人の人影が見えていた
??「とうとう、動き出すときが来たね」
??「これからは、やるかやられるかだ戦力は1人でも多いほうがいい」
??「そういえばガリンはどうなったんだ?」
??「やつか、もしかしたらあっち側についてるかも知れないな」
??「戦力は1人でも多いほうがいいか…。やつの判断はまた後日にしよう」
??「解った」

何も知らないガリンは絶がログアウトした後レベル上げをがんばっていた。
俺は強くなるんだ…
武器を変えて戦っていた。
槍や大剣を使ってみたけど自分には合わなかった・・・
自分は何をもって何のために戦うのだろうか・・・。
結局レベルだけが上がって自分に合う武器も何もわからないまま1日が過ぎた。

美羽との約束の日まで後2日

俺には何がいいんだろう・・・。
そう思いながらログインすると絶がいた。
絶＞やぁ、ガリン君＜ガリン

ガリン＞こんにちは＜絶
絶＞どうかな？武器はきまったかな？＜ガリン
ガリン＞まったくですね＜絶
絶＞そうなんだ・・・＜ガリン
ガリン＞威力が高くて攻撃速度もあるものを探しても都合のいいものなんてありませんね＜絶
絶＞あるよ、かわりに防御力はまったくない。やられる前にやる戦術とした武器が＜ガリン
ガリン＞なんなんですかそれは？＜絶
絶＞二刀流だよ。片手剣を２ついっぺんに装備すると二刀流になって攻撃速度も威力も出る＜ガリン
ガリン＞そんなシステムがあるんですか＜絶
絶＞代わりに他の武器にはある防御力は片手剣にはないから他の武器と比べると防御力がまったくない＜ガリン
ガリン＞今度試してみます＜絶
絶＞ん～、今度じゃなくて、今試してみるといい。時間がないんだろ？それに俺は今暇だから、ついていってどんなものか見てやるよ＜ガリン
ガリン＞ありがとう＜絶

そして今日も絶につれられて狩場に来た

絶＞ここの敵はお前のレベルと同じだから心配ないだろ。まずは片手剣を２つ装備するんだ＜ガリン
ガリン＞はぃ＜絶
言われたとおりに２つ装備してみる
絶＞それであいつを倒してみろ＜ガリン
っと絶があいつといったモンスターは
ガーゴイルＬＶ４８

大きくて1つしかない目をもった人間に羽をつけたようなモンスターだただし黒色に染まってる部分が人間とはまったく違う。

ガリン＞解ったよ＜絶
絶も同じレベルだから大丈夫だろうと安心する
絶＞がんばってこい＜ガリン
そしてガリンはその辺にあった石をガーゴイルに向けて思いっきり蹴った。
ガーゴイルに石が当たりこっちを向いた時にはガリンはガーゴイルの背後にいた。後ろから剣でガーゴイルに攻撃する。もちろんゲームなので血などもでずに一発で終わることはない。そんなとこだけがリアルじゃないがそこを除けば完璧なリアルと同じ戦場だ。
ガーゴイルはすぐに攻撃してきた。一発一発が強力な攻撃が襲ってくる。だがこっちのほうが早い
スキル：乱舞
自分が発動した技により高速で3発の攻撃を決めてダメージを受けずにガーゴイルを倒した。
絶＞おぉ、同じレベルのガーゴイルを無傷で倒すか＜ガリン
ガリン＞二刀流いいですね。ありがとう、これから使わせてもらうよ＜絶
絶＞さて、肩慣らしは終わったしまた挑戦してみようか自分より強いレベルのボスに＜ガリン
ガリン＞はぃ＜絶
第4章［自分の剣］完

第４章［自分の剣］（後書き）

次回もう一度キングスライムとの戦闘今度はどっちが勝者になる？

第5章［己でやるべきこと］

絶につれられてもう一度あの場所に行くガリン。
絶＞いい戦術でもあるのか？＜ガリン
ガリン＞あるよ。前と違ってスキルも戦術もいろいろ＜絶
絶＞まぁ、がんばってくれ、目的はキングスライムの討伐だ＜ガリン

キングスライムＬＶ５０

また、こいつの前に立った
そして、ガリンは突撃した。前回みたいに自分の体から触手をだしてガリンを襲う。
それを回避しながら突っ込んで敵に切りかかるが、スライムの体が剣山のように針が出てきた。
ガリンはダメージを受けながらでも2刀流で攻撃をする。その攻撃のたびに敵が増える。
絶＞ガリン、敵が多いぞ一回全滅させたほうがいいと思うが＜ガリン
絶のいうとおりだ。敵は１０体くらいに増えてきた。
ガリン＞このときのためにスキルがあるんだろ？＜絶
返事しながらスキルを発動する
スキル：回転
１回転して剣で敵を刻む。感覚的にはこまに剣をつけたようなもんだ。
威力は高い。さっきまで１０体くらいいた敵がすでに一体（キングスライム）のみになっている。
絶＞それでいいそのまま行け！＜ガリン
しかしスキルの発動と無茶のしすぎでライフもＳＰ（スキルを発動にいるもの）が残り少なかった。
また、負けるのか俺は・・・。

そして頭の中に一言が思い出される。
絶がいった［目的はキングスライムの討伐だ］っということを・・・
そして剣を強く握って最後の力を出す。
スキル：炎舞
ライフとＳＰを削って発動した。現在最強のスキル。ライフが２５％以下じゃないと発動できないが威力は強力なのだ。
剣が燃えて、その状態で高速の攻撃を連続で繰り出す。
１０発の一撃一撃が重い連撃、高いダメージが連続で出てキングスライムを倒した。
そして、その周りに２５体のスライムＪがいた。
もう、剣を持つ力もねぇや・・・。
ガリンはその場に倒れた。
そして、絶が言った
絶＞よくやった、合格だガリン＜ガリン
スキル：抜刀術－絶
絶はスキルを発動して周りの敵を一掃した。
絶＞さて、帰るか＜ガリン
俺に回復アイテムを使ってから町に戻った。
絶＞まさか、１日で倒せるとは思ってなかったよ＜ガリン
ガリン＞倒してもその後に倒されたら一緒でしょ＜絶
絶＞いいや、お前は目的を達成したからお前の勝利だ＜ガリン
ガリン＞そうなんですか＜絶
絶＞不満そうだが勝者は無理してでも笑えそれが使命だ＜ガリン
苦笑いした俺をみて絶は
絶＞明日からも戦い方を教えようか？＜ガリン
ガリン＞お願いします＜絶
そして明日も会うことを約束してからログアウトした。
第５章［己でやるべきこと］

第5章［己でやるべきこと］（後書き）

後1日のとこで終わりです最後の日ガリンは何を考える？
そして絶と一緒にいる時なにがおこる？

第6章［闇と光、そして信じる道］

次の日
俺はログインするとすぐに絶にささやきをした。
ガリン＞おはよう＜絶
絶＞おはよう＜ガリン
すでに絶はログインしていた。何時にインしてるのだろう・・・。
絶＞とうとう今日だね＜ガリン
ガリン＞なにが？＜絶
絶＞約束の日じゃなかったけ？美羽って人との＜ガリン
・・・。忘れていた・・・。
絶＞道は自分が決めろよ。ガリン、道を決めるのは美羽って人でもザンってやつでもない、お前だからな己の道は己で決める。これが俺の鉄則だ＜ガリン
ガリン＞ありがとう＜絶
絶＞それに道は二つだけじゃない。自分でギルドつくるなり、ほかのギルドいくなりするのもいいからな＜ガリン
ガリン＞はぃ、それでも俺は立ち向かわなければいけないと思うんです＜絶
絶＞じゃ午後まで狩場にいくか、俺はお前の道を決めはしないが手助けはいくらでもしてやるからよ＜ガリン
ガリン＞本当にありがとう＜絶
絶＞じゃいくぞ＜ガリン

そして絶についていって着いた場所は

［スライムの森］

絶＞今日の目標はこのダンジョンの最深部に午後までにつくことだ

＜ガリン
ガリン＞どれくらいかかるの？＜絶
絶＞道による。正しい道ならすぐにつくけど、間違った道をすすめば敵の罠があったりする＜ガリン
ガリン＞解った。じゃ行ってくるよ＜絶
絶＞待った。回復アイテムすべて渡してくれ＜ガリン
疑問に思いながらガリンはアイテムを渡した。ライフ回復とＳＰ回復アイテムを・・・。
絶＞これくらいだろう・・・＜ガリン
絶は納得したのかアイテムを渡した。
ライフ回復が１００個、ＳＰ回復が５０個
ガリン＞少なすぎません？自分より高レベルのダンジョンにいくには・・・＜絶
絶＞あぁ、少ないよ普通じゃクリアできない＜ガリン
ガリン＞じゃ、なんで！＜絶
絶＞最悪な状況で生き残る方法を見つけ出せ＜ガリン
ガリン＞まぁ、期待せずにいてくださいね。行って来ます＜絶
そしてガリンは［スライムの森］に入っていった。

そして、その時
？？＞さて、ガリンは敵か味方になるか判断しよう＜？？
？？＞戦場で裏切られることを考えると見方にしないほうがいいんじゃないか？＜？？
？？＞しかし、何度も言うように戦争になると人は1人でも多いほうがいいと思わないか？＜？？
？？＞確かにそうだが・・・。ガリン1人で敵を何人倒せる？誰も倒せずに終わるなら味方にする意味がないだろう？＜？？
？？＞それもそうだな・・・＜？？
こんなささやきがあったことはガリンは何も知らない。

そして他にもささやきはあった
??＞お前のことだいろいろ予想できてるだろ？あいつはどう動くと読んでる？＜??
??＞今のとこは何もいえないね。あの人は何をしだしてもおかしくないからね＜??
??＞まぁ、どんなときになっても俺はついていってやるから心配はするな＜??
??＞うん、ありがとう。戦争は起こると思うから君の力を信用してるよ＜??
??＞まかしとけ＜??
いろんな理想などがある中、時は同じ時間で進む
第６章［闇と光、そして信じる道］完

第6章［闇と光、そして信じる道］（後書き）

次回はスライムの森です。
なんでスライムばっかりだすかって？
よくいる敵だからですよ

第7章［見えるやさしさと見えないやさしさ　前半］（前書き）

美羽との約束の日ガリンは自分を鍛えるためにスライムの森に入る。

第7章［見えるやさしさと見えないやさしさ　前半］

［スライムの森］
ダンジョンに入ると絶は
絶＞じゃ、ここからはお前の判断がすべてだから自分ひとりでがんばれ＜ガリン
ガリン＞あぃ＜絶
そして中に進む

スライム　ＬＶ５０
キングスライムを小さくしたような姿だ

早速現れたスライムただのスライムだから回復アイテムを使うまでもないだろう
スライムは近づいてきて、そして飛び掛ってきた。
それをしゃがんでかわし、地面についた瞬間を狙って切り裂く。
たかがスライム１匹に時間も体力も使ってられないな。
次の道を見ると
スライムが５体いた。

どうやら敵も団体で動いてるようだ。
そして５体のスライムは仲間（さっきのスライム）の敵討ちなんだろう・・・
・・・いくか・・・
５体のスライムに突っ込むそして
スキル：回転
雑魚敵は雑魚敵でスキルで一撃で消せる。
そして一掃した。
そして、奥に進む道を見つけ次に進む

［スライムの森　２］
中に入り奥に進むと罠が発動した。
さっき通った道も次に続く道も閉ざされモンスターが大量に出てくる

スライム　ＬＶ５５
キングスライム　ＬＶ５０
ダークスライム　ＬＶ５０

キングスライムの小さいのがスライムだが・・・
ダークスライムはそのスライムの大きさで黒い・・・

スライム５体、キングスライム１体、ダークスライム５体って罠でも鬼すぎないか？運営会社・・・
そんなことを考えてる間に敵が飛び掛ってくる。
スキル：回転
回転してなぎ払おうとするとダークスライムにあたり回転が止まる・・・。
ダークスライム・・・それはスライム系でもっとも硬い敵・・・。
そして、スライムは倒したがキングスライムとスライムＪ―（出た理由は第３章を参考）とダークスライムが残ってしまった。
そして、倒せなかった敵の反撃がおこる。
キングスライムが地面から触手を出して俺の脚をつかむ。
そして、他のスライムが体当たりしてくる。
ここでやられるわけには・・・。
俺は負けない・・・。
自分の剣で自分の足を刺す。正確には足に取り付いてる触手を刺してる。
そして、きられたとこがスライムＪになる。その瞬間足に引っ付いてるスライムを蹴り飛ばしキングスライムにぶつけキングスライムに走って突っ込む。

スキル：炎刀（エントウ）
剣が燃え出すスキル、攻撃スキルではないので普通にキングスライムとスライムＪを切り裂く。
威力が上がってる炎の剣で何度も切る！。
キングスライムが倒れ、スライムＪが大量に増える。
スライムＪが２５体にダークスライムが５体・・・。数は多いといっても回転で一撃で倒せるスライムＪは問題じゃない。問題なのはダークスライム。だが強化した今の剣なら一刀両断できるはず・・・。
スキル：円
これで一掃できる・・・。発動されない！？。
よく見るとＳＰがなくなっていた・・・。
炎刀はとうぶん消えないが通常攻撃のみでこの場を何とかしないといけない・・・。
ダークスライムに切りかかる。一撃で倒せるが他の敵が襲い掛かる・・・。
そして、意識がなくなり・・・。俺はその場で倒れた。

第7章［見えるやさしさと見えないやさしさ　前半］（後書き）

前半終了次回後半です

第8章［見えるやさしさと見えないやさしさ　後半］（前書き）

スライムの森で倒れたガリン。一体どうなるのだろう

第8章［見えるやさしさと見えないやさしさ　後半］

意識を取り戻したガリンは、その場に起き上がった。
モンスターにやられて町に戻ったかな・・・
そんなことを思いつつ起き上がり場所を確認する。
ゲームの中の話だがリアルなことを特化してるこのゲームでは意識を失う（気絶）ことがあり自分がいる場所もアイテムのマップがないと見れないのだ。
意識を失うことは初めてだったがリアルにできているんだな・・・
そんなことを思いながら自分の今いる場所を確認する。
見える物は木のみ・・・
気になってマップを取り出して見てみる。
［スライムの森2］
モンスターの前で意識を失って絶望的な状況だったのに生き残っていたのだった。
誰かが助けてくれたのかな・・？
その疑問があったので辺りを見回すが見える場所にプレイヤーはいなかった。
通りすがりのプレイヤーが助けて先に進んだんだと思い深く考えないことにした。
時間を見ると戦ってた時から2分くらいしかたっていなかった。
そして前に進むことにした。
ライフもＳＰも回復して次の場所へと移動する。
そんなときにささやきはきた。
絶＞ガリン君、調子はどう？＜ガリン
ガリン＞今さっきまで気絶してましたよ。誰かが助けてくれたようで助かりました＜絶
絶＞それはよかったね～。その調子でがんばって＜ガリン
ガリン＞はぃ＜絶

そして、俺は森の中を進んでいった。
ついに、俺は最後の場所についた。
そして、冒険者を待ち受けるボスが現れた。

ダークスライムキングＬＶ６０
ダークスライムのキングバージョン。ただの黒い塊・・・。

俺のＬＶは５９まで上がり、回復アイテムはライフは１０個ＳＰは５個残っている。
最後の力でボスを倒しにかかる。
２つの剣を鞘から抜き敵に構える。
スキル：炎刀（エントウ）
剣に炎をまとわせる。ダークスライムは属性攻撃がよく効くからである。
そして、ダークスライムキングに突っ込む。
ダークスライムキングは突っ込んでくる俺に自分の体から針のように鋭い針で体を囲む。
イメージするなら栗のような針の玉。
俺はそれを回避することができず大ダメージを受ける。そしてアイテムでライフを回復する。
炎の剣で針を切っていく。スライムキングのように切れた部分がダークスライムになるかと思えば何も起こらなかった。どうやらスライムキングが特別のようだ。
剣で切ってる間に俺の左足に地面から伸びた触手が絡みつく。
スライムキングのほうに触手を切って逃れようとすると剣で刺す前に、
触手から体にあるような鋭い針が出てきた。
うぅ・・・
ダメージを受けながら触手に剣を刺す。何とか逃れて距離をとってライフを回復する。

一瞬でライフ回復アイテムが5個なくなった。敵の一発、一発の攻撃がでかいのだ。
このままじゃ勝てる気がしない・・・
そうさとって強力なスキルを繰り出す
スキル：炎舞
前にスライムキングを倒したこのスキルにかけるガリン。
１０発の攻撃が終わりどうだと見たときにダークスライムキングは・・・
生き残っていた。
そして、自分の体から槍のように鋭く太い物をだしてとどめを刺しにくる。
それを見てすぐに回復アイテムを使い剣でガードする体勢に入る。
ライフがぎりぎり残り回復アイテムがなくなった時点で俺はスキルを発動する。
スキル：投剣（トウケン）
二つの剣を相手に向けて投げる。
２本の炎の剣がダークスライムキングの体に刺さりダークスライムキングは倒れた。
俺はスライムの森をクリアした。
第８章［見えるやさしさと見えないやさしさ　後半］

第8章［見えるやさしさと見えないやさしさ　後半］（後書き）

次回［見えるやさしさと見えないやさしさ　外伝］

外章［見えるやさしさと見えないやさしさ　外伝］（前書き）

これは美羽との約束の日の午前の絶を書いた物です

外章［見えるやさしさと見えないやさしさ　外伝］

俺の名前は絶。
２３０レベルのプレイヤーで自分でも上位クラスのプレイヤーの１人だと思っている。
そんな俺には小さなきっかけで面倒を見ている初心者のガリンがいる。
今日もガリンの修行に付き合うためにログインをしている。
ガリン＞おはよう＜絶
絶＞おはよう＜ガリン
ちょうどガリンがログインしてきた。約束の日が今日なので聞いてみる。
絶＞とうとう今日だね＜ガリン
ガリン＞なにが？＜絶
忘れているのか？
絶＞約束の日じゃなかったけ？美羽って人との＜ガリン
絶＞道は自分が決めろよ。ガリン、道を決めるのは美羽って人でもザンってやつでもない、お前だからな己の道は己で決める。これが俺の鉄則だ＜ガリン
自分でいっていても恥ずかしいセリフを言う。
ガリン＞ありがとう＜絶
絶＞それに道は二つだけじゃない。自分でギルドつくるなり、ほかのギルドいくなりするのもいいからな＜ガリン
ガリン＞はぃ、それでも俺は立ち向かわなければいけないと思うんです＜絶
絶＞じゃ午後まで狩場にいくか、俺はお前の道を決めはしないが手助けはいくらでもしてやるからよ＜ガリン
ガリン＞本当にありがとう＜絶
絶＞じゃいくぞ＜ガリン

向かった場所は

［スライムの森］

絶＞今日の目標はこのダンジョンの最深部に午後までにつくことだ
＜ガリン
ガリン＞どれくらいかかるの？＜絶
絶＞道による。正しい道ならすぐにつくけど、間違った道をすすめば敵の罠があったりする＜ガリン
ガリン＞解った。じゃ行ってくるよ＜絶
絶＞待った。回復アイテムすべて渡してくれ＜ガリン
回復アイテムを受け取り
絶＞これくらいだろう・・・＜ガリン
適当な数をガリンに返す。
ガリン＞少なすぎません？自分より高レベルのダンジョンにいくには・・・＜絶
絶＞あぁ、少ないよ普通じゃクリアできない＜ガリン
ガリン＞じゃ、なんで！＜絶
絶＞最悪な状況で生き残る方法を見つけ出せ＜ガリン
ガリン＞まぁ、期待せずにいてくださいね。行って来ます＜絶
そしてガリンは［スライムの森］に入っていったのを見守った。
さて、ガリンを追いかけるか・・・。
俺はさすがに見捨てるようでだめだろうっと思いガリンの後をこっそりついていった。
そのとき、ささやきがきた
？？＞やっほー＜絶
絶＞おはよう＜？？
？？＞ささやきした直前だけど用事あるから一緒に狩にはいけないよ＜絶
絶＞別にいいよ、俺も用事がある＜？？

追いかけて見守ってやらないといけないからな・・・。
??＞へー、珍しいね。絶が何かするなんて今日は嵐だね＜絶
絶＞うるさいな、お前こそ用事があるなんて珍しいじゃないか＜??
??＞そろそろ戦争が起こると思うから仲間を増やそうと思ってね。
あの人を勧誘しようと＜絶
あいつか・・・。こいつはあいつがどう動くかわかってるのか？
疑問を率直に聞いてみる。
絶＞お前のことだいろいろ予想できてるだろ？あいつはどう動くと
読んでる？＜??
??＞今のとこは何もいえないね。あの人は何をしだしてもおかし
くないからね＜絶
絶＞まぁ、どんなときになっても俺はついていってやるから心配は
するな＜??
??＞うん、ありがとう。戦争は起こると思うから君の力を信用し
てるよ＜絶
絶＞まかしとけ＜??
そろそろ、動かないと見失って探すのに手間がかかるな・・・。
絶＞じゃそろそろ行くからまた後でな＜??
??＞はぃはぃ～＜絶

ガリンを探すのには少し苦労した。
［スライムの森］を大体全部調べたがもう、いなかった。
もう、探す場所がないな。
［スライムの森　2］に移動するとガリンがいた。
急いで物陰に隠れる。
ガリンにとっては俺は来てないっと思っているから隠れなければな
らなかった。
そして、物陰で見ていると
ガリンが倒れていた。
どうやら気絶したようだ。

やばいな・・・。モンスターたちがとどめをさしに行ってる。
やっぱ助けるべきか・・・。でも・・・
考えているうちにモンスターはガリンの目の前まで来ていた。
ッチ
心の中で舌打ちして、俺は飛び出す。
スキル：雷刀（ライトウ）
刀に電撃が通る。ダークスイライムに切りかかる。
スキル：抜刀一絶
前にガリンを助けたスキルでまた助ける。
神速の速さで抜刀しその勢いでできた風が敵を切り裂く、高レベルで扱えるスキルなのだ。
ガリンは助けたが気絶を直ると俺がいることがばれてしまうので俺はモンスターがいなくなると同時に隠れた。
運良くガリンは目を覚まさなかった。

そして、気絶が直ったようでガリンは立ち上がった。
すごく不思議そうにあたりを見回すが誰もいないと信じて進み始めた。
俺はなんとなくささやきを送った。
絶＞ガリン君、調子はどう？＜ガリン
ガリン＞今さっきまで気絶してましたよ。誰かが助けてくれたようで助かりました＜絶
絶＞それはよかったね～。その調子でがんばって＜ガリン
ガリン＞はぃ＜絶
そしてガリンは何の問題もなくボスがいる場所までたどりついた。
もう、見守る必要もないか。
そして、ガリンを残し先にタウンに戻った。

俺はガリンと初めて会った俺のお気に入りの場所で座っていた。
するとささやきがきた。

ガリン＞絶さん～＜絶
ガリンからだった。
絶＞どうした？＜ガリン
あくまで冷静に答える。
ガリン＞何とか、スライムの森攻略できました＜絶
それを見て俺は安心した。
絶＞そうか、それはおめでとう＜ガリン
ガリン＞それでね。それでね＜絶
それからガリンのスライムの森での冒険した話を聞いた。
そして、俺は心の底から思った。
こいつには正しい道を進んでもらいたい。そして、このままこいつと笑って話していたいな。
これは約束の日の午前のことである
外章［見えるやさしさと見えないやさしさ　外伝］　完

外章［見えるやさしさと見えないやさしさ　外伝］　（後書き）

アイテムやクエストを手伝う見えるやさしさも大切だが
絶のように見えないとこで何かをやってあげるのも大切なのかもしれません。

第9章［己の道］

俺はスライムの森での話を２０分ほど話した。
絶＞さて、これからは自分の道を決めに行って来い。たとえそれが俺を敵にすることになってもだ＜ガリン
ガリン＞え？＜絶
絶＞たとえ話だよ。もしも、お前の選択で俺と戦うことがあったら、俺は容赦なく斬るぞ＜ガリン
今までとちがって冷たい言葉がガリンに告げられる。
絶＞そのときはお前も斬りかかって来いよ＜ガリン
ガリン＞そんなの・・・。そんなことできないよ！＜絶
絶＞なら、お前は戦場で生き残っていられないなぜなら戦場で相手のことを思ったとき負けるからだ＜ガリン
ガリン＞でも・・・＜絶
絶＞でも。じゃない、それが戦うってことなんだよ。じゃ、俺は落ちるよ。お前とまたこうやって話せることを期待してる＜ガリン
意味が解らなかった。絶の言い方だと丸で俺の選択で絶と戦うことになるみたいじゃないか・・・。
俺の選択は３つ。
美羽さんに別れを言って、このギルドで美羽さんと戦う。
美羽さんと協力して、このギルドに戦いを挑む。
美羽さんとギルドに別れを言って、無関係になる。
どれも正解のようで正解じゃない・・・。
元々、正しい答えなんてないのかもしれない。
俺は・・・。俺は・・・。
俺は自分の道を進むのみ・・・。

私の名前は美羽・・・。

私は、初心者を騙してこき使うギルドを許せない。
そして、見つけてしまった自分が入ってるギルド［神の判断］でその行為があったことを・・・。
でも、自分はそれが間違いだと思いたかった。
しかし、現実は甘くなかった。私は知ってしまった。
［神の判断］ギルドマスター［ザン］は初心者を騙してアイテムを持ってこさせて、
その、アイテムを売り儲けていることを。
そう。このギルド（［神の判断］）は闇ギルドのひとつだということ。
闇ギルドとは、この世からなくなればいいギルドって意味があり。
初心者を騙す集団。改造してデーターをいじくる者たちの集まり。
ハッカーの集まり。詐欺師の集団そんな意味がある。
そして、犠牲者―（初心者）が入ってきた。私は見てみぬ振りはできなかった。ガリンという初心者でザンに育ててもらっているが、
それはこれからガリンをいいように扱うために育ててるのであって本当のやさしさじゃない。
だから、私はできるだけガリンに用事や狩に連れて行った。そうすることでザンの言う事を聞かなくてもいいんじゃないかと思ったからだ。
解っている自分が偽善者だってことは・・・。
すぐにでも、このギルドが危ないってことを言うべきだった。私は、解っていても誰一人も救えない・・・。誰も救ってあげれない。
自分の無力さがいやになる・・・。ガリンは私が出してしまった犠牲者なのだ・・・。
私は、ガリンに別れを告げてから3日間の間、狙撃の練習をしていた。本当はゲームに毎日ログインしていたのだ。
でも、あの子に早く答えを出させるのは残酷なので私はあえて3日後にしたのだ。
それに、私の得意な武器はライフルのような遠距離射撃なのに最近

は近距離攻撃の武器を使っていた感覚を思い出すためにも3日必要だった。
そして、3日がたった今日またガリンに会うことになる。
ガリンはどう答えてくれるんだろう・・・。

俺の道は己で決めるか・・・。
美羽さんに言おう自分の道を・・・。

そして、二人はであった。

美羽「こんにちは」
私はあくまでいつものように話す。
ガリン「こんにちは」
ガリンも挨拶をする。
美羽「今日で返事をくれるんだよね？」
私は、怖かった。なぜなら返事でもしも、「ついていけません」っと言われるかもしれないからだ。
ガリン「はぃ。今日は、そのことを話しに来たんですから」
私は、決心がついた。この子が仲間になったにしろ、ならなかったにしろ。
私は、［神の判断］を潰す。
ガリン「俺は・・・」
でも、ついてこなかったらガリンも倒さなきゃいけない。私はどうすれば・・・。
ガリン「美羽さんに協力できません」
私の中で決心がついた。この子を敵にしてでも、［神の判断］と戦う。
美羽「じゃ、今度合うときは・・・」
敵ねっと言うまえに
ガリン「ですが！」

ガリンの話は終わっていなかった。
ガリン「俺に協力してください」
美羽「え？」
何を言ってるのか解らなかった。
ガリン「俺が、あのギルドを潰します」
美羽「何言ってるの？。あなたの実力でやれるわけないでしょ」
意味がまったく解らない。なぜそれなら私に協力しなかったのだろうか。
ガリン「美羽さんは汚れ役になるような人じゃないです。汚れ役になるのは俺みたいな奴です」
美羽「でも、ここで私が断ったらどうするの？」
ガリン「それでも俺が潰しますよ」
美羽「何で言い切れるの？潰せるって」
ガリン「あのギルドの弱点を突けば何とかなると思うからです」
何を言ってるんだろ。この子は、それなら私に協力すればいいのに
美羽「だったら、何で私の誘いを断って、その後に、私に協力を求めるの？」
ガリン「さっき、言ったのも理由のひとつですけど。俺は、他人に導かれてるだけじゃだめだと思ったからです」
もう、どっちでも良くなった。この子のやり方を見るのも悪くないかも・・・。
美羽「あぁー。馬鹿馬鹿しい。いいわ協力するよ」
ガリン「ありがとうございます」
美羽「っで、どうするのこれから」
ガリン「闇を斬る闇ギルドを作ります」
闇ギルドってザンと同じじゃない！？
美羽「そんなの向こうと同じじゃない！？」
ガリン「いいえ、違います。闇ギルドとは違法行為をするギルド。初心者を騙すのも違法ですが他人のギルドを他人が解散まで追い込むのも違法です。だから、俺は闇ギルドになります」

確かに・・・。だから、この子は私をかばうために自分が・・・。
美羽「解ったわ。それじゃ、ギルド作りますか。名前は決めてるの？」
ガリン「ギルド名は［神滅］その意味は［神を滅亡させる者］」
美羽「へー。じゃ、そうしますか」
そして、あたらな闇ギルド［神滅］が誕生した。

第9章［己の道］　（後書き）

そろそろ終盤です～

第１０章〔神の滅亡を望むもの〕

美羽『って、これから何するの？』
美羽さんがギルドチャットで聞いてきた。
ガリン『とりあえず、仲間を探します』
俺の目的を言った
美羽『え？』
ガリン『人数が多くないとね』
美羽『でも、１人でも壊すって』
ガリン『無理ですよ。１人じゃ』
美羽『え？。弱点つけばなんとかって』
ガリン『あぁ、協力者が何人かいるんですよ』
そう、弱点はいくつかあるがそこをついても壊せない。
美羽『じゃ、私が１人紹介するわ』
ガリン『それはありがたい』
美羽さんはささやきで誰かと話出した。
ここでなぜ俺がここまで強気に勝てるっと言ってるのかのことを説明しよう。
それは少しまえのこと
～回想～
美羽さんの申し出を受けるか受けないか迷っていたときギルドに大人数が入ってきた
ガリン『どうしたんですか？こんなに多く加入するなんて』
俺が聞くと
クロウ『あぁ、美羽のギルドと戦う時に、このギルドを勝利に導いた奴に５００万のゲームマネーをやるっていわれてつれてきたらしい』
珍しくクロウさんが話す。珍しいというか初めてのような気がする。
ガリン『そんなことまでして・・・』

クロウ『そこまでしてでも勝ちたいんだろうあの人は』
クロウ＜君はここにいるべきじゃないよ＞ガリン
いきなりクロウがささやきをしてくる
ガリン＜どういうことですか？＞クロウ
クロウ＜君はね美羽側の人だと思ってスパイだと思われてる＞ガリン
ガリン＜え？＞クロウ
クロウ＜良く美羽と狩にいっていただろ？＞ガリン
ガリン＜まぁ、いってましたけど＞クロウ
クロウ＜それが原因で君は敵だと思われている＞ガリン
言ってることが良く解らない。どうして俺が敵なんだ。
クロウ＜君は、ここにいるべきじゃないよ＞ガリン
ガリン＜そんなこと言われてもね＞クロウ
クロウ＜君には美羽の手助けをしてほしい。そして、このギルドを潰してもらいたい＞ガリン
ガリン＜クロウさん、あなたはこのギルドが嫌いなんですか？＞クロウ
クロウ＜このギルドが大嫌いだ＞ガリン
何でこの人は嫌いなギルドに・・・
クロウ＜だが、このギルドにいることで内部の反乱をおこすことができる＞ガリン
ガリン＜何が狙いですか？＞クロウ
クロウ＜君が美羽の手伝いをして、俺は内部で反乱をおこして、このギルドを壊す＞ガリン
ガリン＜なぜ自分に？＞クロウ
クロウ＜なんでだろうな～＞ガリン
ガリン＜後、俺はそんなことをするのだったら＞クロウ
クロウ＜ん？＞ガリン
ガリン＜美羽さんが潰すんじゃなく、俺が潰します。あの人は汚れ役になるような人じゃないですから＞クロウ
クロウ＜面白いね。君＞ガリン

ガリン＜それはどうも＞クロウ
クロウ＜いいだろう。じゃ、君のやることに手伝おう＞ガリン
ガリン＜それはどうも＞クロウ
クロウ＜何かあったらささやきをくれ＞ガリン
～回想終了～
こうして俺は自分からギルド潰しをしようと思った。
そんなことを思い出してるうちに美羽のささやきが終わったようだ
美羽『連絡取れたわ。今からこっちに来るって』
どんな人なんだろう
ガリン『どんな人なんですか？』
美羽『このゲームの限界レベルに近い人よ』
ガリン『強いんですね』
まるで絶さんみたいな・・・。
美羽『あ、来たわ』
絶「やぁ、ガリンに美羽」
ガリン「え？」
来たのは絶だった。
美羽「もう、知り合ってたの？」
絶「あぁ、俺のお気に入りの場所で座ってたから話かけた」
ガリン「絶さん、どうしてここに？」
絶「呼ばれたからだよ。美羽に」
・・・。つまり、美羽さんと絶さんは知り合いということだ。
絶「いやー、敵にならなくてよかったよ。ガリン君」
確かに俺がもしも、〔神の判断〕にいたら戦っていたんだ。
絶「まぁ、美羽が協力する側になるのは予想外だったけど。仲間になれてよかったよ」
ガリン「っと、言うことは・・・」
絶「もちろん。入るよ。〔神滅〕に」
ガリン「あ、ありがとう」
心強い仲間が入ってくれた。

そして、加入手続きを済まして。
絶『これから、よろしく』
ガリン『こちらこそ、よろしく』
美羽『また、よろしくね。絶』
〔神滅〕に絶が加入した。
絶『それで、〔神の判断〕を壊す方法とやらを聞こうか』
美羽『そうね。聞きたいね』
ガリン『じゃ、説明しますね。向こうのギルドは美羽さんのギルドとの戦いに向けて助っ人を読んでるんです。それも、高レベルばっかりが』
絶『それはまずいね～』
ガリン『ですが向こう側にギルドつぶしを協力してくれるって人がいました』
美羽『もしかして・・・。クロウ？』
ガリン『はぃ』
美羽『やっぱりか～』
絶『あいつも、あそこにはいってたけ？』
ガリン『知り合いなんですか？』
美羽『私と絶、それにクロウはゲームをやり始めたときから一緒の友達なの』
ガリン『え？』
絶『まぁ、それだけだけどね。話続けて』
ガリン『あぁ、はぃ。それでクロウさんが反乱を起こしてくれるのでそれに乗じて、ギルドマスターを倒します』
美羽『なるほど、うまくいけば勝てるね』
絶『反乱があいつにおこせるか、解らないがな』
ガリン『でも、信じなきゃ勝てません』
絶『その通りだな』
美羽『じゃ、私は勧誘できそうな人探すね』
ガリン『あ、自分も行きます』

絶『ガリンは俺と一緒に地獄を見に行ってもらう』
ガリン『え？』
絶『お前、そのレベルで高レベルと戦う気か？』
確かに向こうは１００レベルが当たり前のような軍団・・・。
絶『だから、俺が狩に連れて行って強制的にレベルを上げる。生還できたら１５０レベルまでは余裕でいける。なんせ２３０レベル狩場に連れて行くのだからな』
ガリン『ちょっと、それは死にません？』
絶『生き残ることだけ考えればいい』
ガリン『・・・』
絶『じゃ、いくぞ』
こうして俺は半日地獄を見た・・・。

第１０章〔神の滅亡を望むもの〕（後書き）

神滅が動き出し物語は終わろうとしている

第１１章［戦士の覚醒］（前書き）

神の判断を崩すために作った。
神滅。集う者たちは闇ギルドを憎む者。

第１１章［戦士の覚醒］

次の日
朝ログインする。
ガリン『おはよう・・・』
絶と美羽『『おはよう』』
小坂『はじめまして～』
美羽と絶と小坂が挨拶する。
美羽『昨日は勧誘であんまり入らなかったよ』
ガリン『そうか・・・』
絶『だから、今日はＰＶＰの練習やるぞ』
ガリン『あぃ・・・』
小坂『準備しましょう。マスター』
ガリン『あぁ・・・』
そうして準備をしてＰＶＰの練習をするために決戦場に行く。

［決戦場］
絶『じゃ、１：３で俺が１人でやってみよう』
絶が自信満々に言う
美羽『いいよ～』
ガリン『解った・・・』
小坂『よろしくお願いします』
絶『俺は回避率がかなり高いから、３人でも当たらないと思うから
これ使え』
っと渡されたのは罠アイテム。
絶『落とし穴とネットは敵の行動を不可にして回避率を０にしてく
れる。１０秒だけどな』
美羽と小坂『『へー』』
ガリン『そうなんだ・・・』

3人は絶の説明に返事をする。
絶『じゃ、本気でやるから手加減するなよ』
っと絶は準備しに町に戻った。
美羽『ねぇ、ガリン』
ガリン『・・・ん？』
美羽『元気ないけど、そんなにつらかった？昨日・・・』
ガリン『思い出したくない。許して・・・。もう帰る・・・』
小坂『マスター、大丈夫なんですか！？』
ガリン『ッハ！。ところで君は誰？』
俺は小坂を見て驚いた。
美羽『今頃？』
小坂『僕は昨日、勧誘してもらったときに入ったんですよ』
ガリン『あぁ、よろしく』
小坂『はぃ、よろしくお願いします』
美羽『とりあえず、戦術は罠にかけて袋叩き。がいいね』
ガリン『了解』
小坂『がんばります』
そして、絶との練習で試合する。

絶『じゃ、俺はギルドチャット切るから俺と話すときは全体で』
ガリン、小坂、美羽『『了解』』
カウントが始まり
アナウンス「3・・・2・・・1・・・GO！」
絶は突撃してきた。
絶は抜刀して美羽を斬りに行く。
美羽は予想していたのか絶の素早い攻撃を回避する。
俺たち3人は散らばった。
絶は美羽をあきらめて俺を追ってくる。
剣を2本取り出して、片方の剣で絶の心臓―（左胸）向けて剣を突き出す。

絶は急に足を止めて左に回避。
反応速度速すぎ・・・
もう片方で横に斬る。
絶はジャンプして回避してそのまま縦に斬りに来る。
俺はあわてて2本の剣で受け止める。
絶「やるね～」
絶が話しながらバックステップする。
そのとき、絶がいた場所を銃弾が通る。
美羽『惜しかったな～』
美羽がギルドチャットで話す。
絶は逃げてる小坂に向けて突進する。
小坂は逃げた。
だが絶の方が早い。
美羽が援護射撃するがそれを回避しながら進む。
俺は絶を追う。
小坂は右に飛んだが着地に失敗して倒れる。
絶はそれを見逃さない。
美羽の攻撃を受けながら小坂に向かう。
美羽の攻撃を当たっても回避率判定で攻撃失敗（ミス）になる。
絶が抜刀して右足を踏み込むと
ドン！
地面が爆発した。
地面には地雷が仕掛けられていた。
絶「っく」
大ダメージを受けて絶が転がって煙の中から出てくる。
俺はチャンスだと思って剣を投げる。
スキル：投剣（トウケン）
攻撃は当たってもミスになる。
ガリン『やっぱ、罠にひっかけないと勝てないか』
俺が話しながら絶に近づく。

絶「近づきすぎ」
絶がそんなことを言った。
絶は抜刀の構えをする。
スキル：抜刀－絶
神速の速さで抜刀しその勢いでできた風が俺を切り裂く。
いっきに4ケタあったHPが2ケタになる。
ガリン「反則だろその強さは・・・」
絶「だから3：1なんだよ」
絶は俺にとどめをさしにくる。
美羽の援護射撃で何とか助かる。
ガリン『小坂、落とし穴かネットを仕掛けてくれ』
小坂『え？でも、』
俺たちは落とし穴とネットを1つずつしかもっていない。
これをミスると結構つらい。
ガリン『仕掛けたら言ってくれ』
回復アイテムを使いながら話す。
絶「敵の前で回復してるとやられるよ」
絶は抜刀して横に斬る。
俺はそれを剣でガードする。
小坂『できたよ』
ガリン『小坂は逃げて、多分追わないと思う。美羽さんは援護射撃お願いします』
美羽『了解』
絶はさらに畳み掛ける。
スキル：雷剣（ライトウ）
刀に雷属性をつける
スキル：炎刀（エントウ）
俺も剣に炎をまとわせる。
絶「俺に勝てるかな！？」
ガリン「倒すことだけが勝利じゃないでしょ？」

絶と俺は斬りあう。
俺は徐々にＨＰがなくなっていく。
美羽の援護射撃で何とか逃げる。
俺は小坂が作った罠の右横を通る。
ここで絶が左に行けば罠が作動する。
一か八かだ・・・。
俺は振り返り絶の右胸に目掛けて剣を突き刺す。
絶は左に動く。
そして、罠が作動する。
絶「な！」
ガリン「みんな今がチャンスだ！」
逃げてた小坂が出てきて攻撃する。美羽が遠くから射撃する。
俺は思いっきりスキルを撃つ
スキル：炎舞
あっさり絶は倒れた。

その後
絶『ひどいね～』
絶が言った。
ガリン『罠を教えてくれたのは絶さんでしょ』
絶『まぁ、それが勝つための方法だけどな、っでなんであそこで左に動くってわかったんだ？』
ガリン『・・・』
絶『なんとなくか？』
うなずく俺
絶『そうか。まぁ、お前には期待してるぞ』
ガリン『ありがとう』
絶『あ、そうそう。神の判断と明日戦争するぞ』
絶がさらりと言った。
ガリン、美羽、小坂『『『え？』』』

三人が同じ反応をする。
絶『だから、今日はＰＶＰ練習してたんだよ。じゃ、明日までにガリンは作戦を考えといて』
ガリン『あ、はぃ』
いちよ、俺がマスターなので考えなければならない。
絶『じゃ、今日は解散で、おつかれさま』
ガリン、美羽、小坂『『おつかれさま・・・』』
絶がログアウトすると
美羽『ガリン、大丈夫なの？』
ガリン『あ、大体は考えてあるので』
美羽『それならいいけど』
ガリン『まぁ、うまくいくことを祈っときましょう。俺も落ちますお疲れ様』
俺もログアウトする。
明日、決戦か・・・

第１１章［戦士の覚醒］（後書き）

明日、神の判断と神を滅亡する者は激突。
闇と闇の戦い。その後にあるものは・・・

第１２章［神と神に争う者！？］（前書き）

とうとう、闇ギルドの激突。
ガリンの言う作戦は成功するのだろうか！？

第１２章［神と神に争う者！？］

今日は決戦の日・・・。
いきなりすぎるが絶が用意した戦争の日・・・。
ログインすると［神滅］メンバーは全員いた。
ガリン『おはよう』
みんな『『『おはよう』』』
ガリン『まぁ、準備もなにもできてないけど、絶対勝つぞ！』
小坂『マジスカ！？』
ガリン『マジだよ』
小坂『向こうは３０人ですよ』
ガリン『あぁ、知ってる。知ってる』
小坂『５人くらい２００レベルですよ』
ガリン『解ってる。解ってる』
小坂『どうやって勝つんですか！？』
ガリン『奇跡をおこす！』
小坂と俺の質問の受け答えは少し止まった。
沈黙タイム
小坂『無理でしょ！？。４対３０ですよ！？』
小坂と話してると
絶『向こうが反乱をおこすんだろ？』
絶が言った。
ガリン『あぁ、その時がチャンスだ』
絶『うまくやってくれよ』
ガリン『まぁ、がんばるよ』
そして、闇と闇の戦争が始まったのである。
そう、［神滅］と［神の判断］の激突だ・・・。

［決闘場］

ザン「おひさしぶり」
［神の判断］のギルドマスターのザンが話しかけてきた。
ガリン「おひさしぶり。ザン」
ザン「お前が俺のギルドに戦争を申し込む何て考えていなかったよ」
ガリン「俺たちが勝ったら、約束は守れよ」
ザン「それはこちらのセリフだ」
こうしてギルドマスターどうしの話は終った。
ザン「ルールを決めよう」
ガリン「俺たちは四人だ。そちらも代表三人とギルドマスターで戦ってもらいたい」
ザン「そんな条件のめない。ギルド対ギルドで戦ってもらう」
ガリン「わかった。かわりにそちらは勝負開始から五分後から開始するってハンデくらいくれません？。もちろん、そちらが開始するまで攻撃はしません」
ザン「それくらいならいいだろう」
ルールが決ってここに闇ギルド同士の戦いが始まろうとした。

今回の戦場はビルが多く建っている廃墟の場所だ。
アナウンスがカウントを始め。
４対３０の決闘が始まる。
アナウンス「３・・・２・・・１・・・ＧＯ！」
始まりはしたが神滅メンバーは逃げて、神の判断のメンバーは動かない。
ルールは守ってくれるようだ。
ガリン『じゃ、予定のとおりにいくぞ』
みんな『『『了解』』』
俺の声に返事して作戦が始まる。

一方、神の判断はスタート地点で作戦会議している。
ザン『あっちには強いやつが１人いるがそれ以外は雑魚だ』

ギルドマスターであるザンが話す。
ザン『それに、数でも圧倒的な差がある。多分あいつらは俺たちが1人なったときを狙うつもりだ』
黒猫『だから、2人一組で行動するんだね』
サブマスターの黒猫が言う。
ザン『あぁ、そうだ』
雇われ人A『そんなことどうでもいいんだけどよ。この争いを手伝えば本当に金もらえるんだよな？』
雇われた1人が言った。
ザン『あぁ、賞金は5mだ』
雇われた人『『『うぉぉー！』』』
雇われた全員が盛り上がる。
クロウ『マスター少し、いいですか？』
ザン『珍しいなクロウお前が話すなんて、っでなんだ？』
クロウ『一人に5mずつ払えるんですか？』
一気に場の空気が変わった。
ザン『何いってる？。賞金は500万っであって、1人に500万なわけないだろう？』
雇われた人々『なんだそれ！？』『そんなこと聞いてないぞ！』
っと文句が入る。
クロウ『ではこんなのどうですか？。相手ギルドの1人でもとどめをさせば50万。残り300万は生き残った者で分ける』
ザン『それでいいか？』
雇われ人『もう、それで我慢してやるよ』
雇ったやつも納得した。
ザン『そろそろ、5分だみんな手加減するなよ！』
みんな『うぉぉー』
クロウ＞雇われた奴はお前たちを殺せば賞金がもらえるようにはしたぞ。お前の力見せてもらうぞ＜ガリン
俺はクロウの報告を見て作戦の第一段階が成功してほっとする。

そろそろ、５分か・・・。
開始から、５分がたって神の判断が動き出す。
俺はビルの屋上に立って全体チャットで言った。
ガリン「俺はここにいるぞ！」
敵の動きが止まった。
逃げてるだろうと思っていたのに目の前のビルの屋上で全体チャットで居場所を知らせたのだ。

第１２章［神と神に争う者！？］（後書き）

次回よりギルドの戦争を書いていきます。
～次回予告～
ギルドの争いの中。
敵の目前のビルの屋上に現れたガリン。
ガリンの狙いは？。作戦は成功するのだろうか！？

第１３章［戦場の悪魔！？］（前書き）

敵の目の前に現れて自分の位置を知らせるガリン。
これより、神殺しが始まる！？

第13章［戦場の悪魔！？］

敵の目の前のビルの屋上で俺は叫ぶ
ガリン「俺はここにいるぞ！」
自分の位置を敵全員に知らせる。
ガリン「さぁ、金の亡者ども！俺を討ち取って金をもらうチャンスだぞ！」
俺は雇われた奴に俺を殺すチャンスを与えたのだ。
ザン「馬鹿が！。あいつから殺すぞ！」
ザンが叫ぶ。
そして、銃撃が始まった。
俺に当たる銃弾はすべて命中判定でミスになる。
雇われ人「くそ、なんであたらないんだ！？」
一人がつぶやく
ガリン「超回避装備にした。めったに当たらない。ひとついいか？」
攻撃を受けながら（命中判定でミスにはなってる）聞いた。
雇われ人「遺言か？」
一人が聞いた。
ガリン「遠距離攻撃の皆さんは戦えるだろうが、近距離攻撃の皆さんはそれでいいのかな？どうせ俺たちのギルドメンバーを殺せば金がはいるんだろ？。遠距離攻撃の奴に金をあげていいのか！？。情けないな！、ただ金をもらうために集まったんだろ？だったら、仲間でもなんでもねぇ！。ただの敵だ！」
ギルド［神の判断］の動きが止まった。
ガリン「どうせ、金がもらえるから集まったんだろ？。金は多いほうがいい、もらえるほうがいい！。だったら、ライバルである奴を消せば自分に金が入るんじゃないのか！？」
俺が叫ぶと［神の判断］は動いた。
そう、仲間割れだ！

近距離攻撃の奴は遠距離攻撃をする仲間を殺し始めたのだ。
ザンが叫ぶ
ザン「やめろ！馬鹿ども！。罠だ！」
しかし、とまらない
ガリン「ほらほら！。俺はここにいるぞ、さっさと敵を殺して上ってこないと他の敵が殺しにくるぞ！」
俺があせらせる。近距離攻撃しかできない者は遠距離攻撃ができる奴をある程度、殺してビルに入っていった。
ビルの前には遠距離武器を持っていた者の屍一（一定時間しないと消えない）とザン、黒猫、クロウの3人が残っていた。
やっぱり、あのメンバーは入ってきてないか。
そう思いながら後ろから雇われた人が来るのがわかった。
雇われ人「神滅のギルドマスター、ガリン！その首もらった！」
そんなことをいいながら大勢の人が大斧や剣を持ってる。
ガリン「あーあ、罠の中に飛び込んできちゃった」
そういって俺はビルから飛び降りる。
その瞬間。
ズドン！
バーン！
巨大な爆発がおこった。
そして俺はその爆風で隣のビルまで届いた。
そう、5分間の間にビルに地雷を仕掛けまくったのだ。
地雷の起爆条件はダメージを受けるか誰かが踏むかなのである。
1つが爆発すれば、ビルにしかけたそこらじゅうの地雷が一斉に爆発するのだ。
ガリン「これが、俺の戦い方だ！。ザン！」
ザンを挑発する。
ザンが雇ったメンバーは全滅した。
ザン「悪魔め！」
ザンが叫んだ。

ガリン「あぁ、俺は悪魔だ！。神滅の悪魔、いい響きじゃないか？」
俺は開き直った。元より闇を道を走る覚悟。
ガリン「さぁ、これからが神殺しの本番だ！」
２００レベルを超えるクロウと１５０レベル代が２人。
ここからが［神滅］ＶＳ［神の判断］の戦いなのだ。
ガリン「さぁ、楽しませてくださいよ。ザン」
ザン「上等だ。お前は俺が倒す」
ザンは挑発にのる。
黒猫「ガリン君、君がこんなことするなんてね」
黒猫も言った。
クロウ「ガリン、すばらしい戦術だよ。まさに、戦場の悪魔っと言ったとこかな」
クロウが言う。
クロウ「でもね、１つの戦術を終わったあとも考えないと完璧じゃないよ」
クロウが俺のいるビルの中に入る。
ガリン『絶さん、舞台はできた。後はよろしく』
すばやく、ギルドチャットに切り替えて話す。
この争いが始まるまえに絶とささやきをやっていたのだ。

絶＜ちょっといいか？＞ガリン
ガリン＜めずらしいね、絶さんからささやきは＞絶
絶＜今回のギルドの対戦のことだ＞ガリン
ガリン＜それなら完璧だよ。戦術も完成してるし＞絶
絶＜そっち、じゃない。クロウについてだ。俺とあいつが対戦する。
そんなシナリオにできないか？＞ガリン
戦う理由はともあれ、可能か考える。
ガリン＜はじめの作戦で死んでいなければＯＫだ＞絶
絶＜それでもいい、俺とあいつがあたるようにしてくれ＞ガリン
ガリン＜・・・＞絶

絶＜理由が必要か？＞ガリン
ガリン＜お前はやっぱ英雄だな＞絶
絶＜え？＞ガリン
ガリン＜解った。できるだけそうなるようにやってみる。＞絶
絶＜すまない・・・＞ガリン

絶さん、負けるなよ・・・。

絶はビルの中でクロウを待っていた。
クロウ「やっぱり、ここにいたのか」
クロウが階段を上がってきた。
絶「まるで、いて当然っていう風な言い方だな」
クロウ「あぁ、解っていた。爆弾の爆風で飛ぶなんて作戦で初めから考えていたら、ガリンは戦場の悪魔でもなんでもない。ただの一般人だからな」
絶「思いは同じか」
クロウ「あぁ、半年前、俺とお前の決闘は美羽によって中断した。それから、決闘するチャンスがなかった」
絶「あの時の決着を今こそつけよう」
絶は刀を取り出して抜刀体勢になる。
クロウは小さなナイフと拳銃を持つ。
絶「変わらないな、小回りの利くナイフと拳銃で遠距離も近距離も得意とする」
クロウ「絶、お前は変わらないといけないのに変わっていなさすぎだ。お前の得意とする攻撃スキル、抜刀ー絶」
絶「あぁ、そうだ。抜刀ー絶。それを極めた」
クロウ「逆に言うとそれ以外の攻撃スキルはないんだろ？」
絶「さぁな？」
クロウ「お前のことは解っている。自分の名前のスキルを大事にしてるのはわかる」

絶「さて、そろそろ、決着をつける時かな？」
クロウ「あぁ、終わらせよう。半年の決闘を」
そして、二人が動く

第１３章［戦場の悪魔！？］（後書き）

大量のメンバーをなくした神の判断。
その中で昔の決着をつける絶。
次回
絶ＶＳクロウ

第１４章［決着の先に！］（前書き）

絶とクロウ。ゲームをやり始めたときからの友達、昔の決闘の決着を今つける。

第１４章［決着の先に！］

俺はここでクロウと戦い勝つ。
それが俺のやるべきこと。
昨日、［神の判断］のサブマスターからささやきが来た。

黒猫＜すいません＞絶
絶＜何ですか？＞黒猫
黒猫＜あなたは、闇ギルドを潰す［神滅］のメンバーですか？＞絶
なんで、俺のことを・・・
絶＜そうですよ＞黒猫
黒猫＜お願いがあります＞絶
お願い？。いきなり何言ってんだこの人。
黒猫＜彼を、私のギルドのマスターを止めてください＞絶
絶＜はぁ？。何言ってんですかあんたは、止めるんだったら自分で止めりゃいいでしょ＞黒猫
黒猫＜私じゃ止めれないんです。だから、お願いします＞絶
絶＜とりあえず、どこのギルドの誰を止めるんだ？＞黒猫
黒猫＜ギルドは［神の判断］名前はザン。あなたたちが潰そうと思ってるギルドでしょ？＞絶
驚いた。こっちの情報が向こうにだいぶ知られている。
絶＜なんでだ？なんで俺たちに頼む？＞黒猫
黒猫＜私じゃ何もできないから、あの人を止めることはできないから＞絶
絶＜・・・＞黒猫
黒猫＜だから、お願いです。［神の判断］を潰してください・・・＞絶
絶＜解った。明日、ギルドでの対戦をする。それに負けたらあんたらのギルドは解散、俺たちが負けたらあんたらのことを忘れる。そ

の条件で戦ってもらう。いいな？＞黒猫
黒猫＜ありがとう＞絶

だから、俺は負けられない。
刀を抜刀する。それをナイフで受け止める。
クロウはもう片方の手で拳銃を撃つ。
バックステップしてそれを回避する。
後ろに飛びながら、刀を鞘に収める。
スキル：抜刀ー絶
風の刃がクロウに襲い掛かる。
ナイフを振り、風の刃を止める。
絶「やるね～。やっぱ一筋縄じゃ無理か」
クロウ「お前は絶以外できないから攻撃パターンがよめるんだよ」
絶「そうか、それでも勝つ」
クロウ「敗北するのはお前だ。絶」
ぶつかり合う。絶とクロウ。
回復アイテムをだいぶ使った。
絶「そろそろ、決着つけようか？」
クロウ「お互いに。回復アイテムがそこをつくころだからな」
絶「あぁ、そうだな」
そういってスキルを放つ
スキル：抜刀ー絶
スキル：風界
ナイフを地面に突き刺して風の壁がうまれる。
絶の攻撃は消えた。
そして、そのままクロウがいる場所まで走り刀で切る。
刀の攻撃を拳銃の銃口で受け止める。
絶「おぃおぃ、マジかよ」
クロウ「これが、現実だ」
銃口に刀が当たっているまま、銃弾を放つ。

刀が宙にまう。
クロウ「チェックメイトかな？」
俺の首にナイフが当たっている。
絶「・・・」
俺の後ろの方に刀が落ちた。
クロウ「終わりだ！。絶」
ナイフが俺の首を切るより早く。後ろに飛ぶ。
クロウ「早い！？」
絶「油断大敵。決着はすぐにつけるべきなんだよ」
刀を取り抜刀の体勢になり。
スキル：抜刀ー絶
クロウ「それは通用しない！」
スキル：風界
風の壁がクロウを守る。
守ってる間に拳銃で絶を狙う。
絶「なら、絶の上を見せてやるよ」
スキル：抜刀ー絶牙
刀を振ると風が獣の形をしてクロウに襲い掛かる。
クロウ「なんだこれは？」
絶「絶を極めた者しか使えないスキルの１つだ」
クロウ「しかし、風の壁を越えれはしない」
獣が壁に当たる。
暴風になって壁を相殺する。
クロウ「馬鹿な！？」
絶「これで壁はなくなった！」
クロウ「しかし、風くらい斬れば良い」
絶「なら、斬ってみるがいい」
スキル：抜刀ー絶連
抜刀を一回行うだけで風の刃が何個も現れる。
クロウ「な・・・」

刀から現れた、無数の風の刃に驚く。
クロウ「防ぎきれない。なら！」
スキル：投剣（トウケン）
クロウはナイフを投げた。
クロウ「刺し違えてでも！」
ナイフが俺の胸に刺さる。
風の刃がクロウを切り刻む。
お互いのＨＰが０になる。
絶「さすがだわ、お前」
クロウ「ぎりぎりだ。絶、お前はやっぱ強い」
絶「まぁ、また決着がつかなかったな」
クロウ「どっちも負けない。それが決着じゃないか？」
絶「面白い答えだ」
笑いながら二人は消えた。

絶が消えた！？。あいつは負けたのか。
絶、あんたの思いは俺が受け継ぐぞ。

第１４章［決着の先に！］（後書き）

絶とクロウの決着は相打ちに終わった。
残るメンバーは
神滅
ガリン、美羽、小坂
神の判断
ザン、黒猫

第１５章［決戦、神と悪魔］

絶『すまないな』
戦場から消えた絶からのチャットだ。
ガリン『いや、別にいいよ』
俺が言った
絶『クロウと戦ったが』
美羽『え！？クロウと戦ったの！？』
クロウと戦うことを知らなかった美羽は驚く。
絶『あぁ、昔お前に止められた決着をつけたくてね』
美羽『そう・・・』
絶『相打ちだったよ』
ガリン『そうか、よくやってくれた。後は任せてくれ』
絶『そのことだが、話したいことがある』
やけにシリアスなムードだ。
ガリン『なんだ？』
絶『今回の決闘だが、向こうのサブマスターから誘われたんだ』
美羽『黒猫さんが？』
美羽が聞いた。
それから、黒猫との話を絶はした。
ガリン『なるほど、そうだったのか』
絶『すまない、もう少し時間をもうけるべきだったのに』
ガリン『いや、もう良いから。話してくれてありがとう』
そして気持ちを戦うことに集中する。
そして、目の前に黒猫が現れた。
俺はすぐに双剣を取り出す。
黒猫「話を聞いてください」
黒猫は武器をださずにチャットをする。
ガリン「なんだ？」

武器を構えながら聞いた。
黒猫「絶さんから話は？」
ガリン「今さっき聞いた」
黒猫「どうかお願いします。ザンをとめてください」
ガリン「お前は、ザンが変わることを望んでいるんだよな？」
黒猫「はぃ」
ガリン「じゃ、何でお前の手で変えようとしない？。なんで自分から変わろうとしない！」
黒猫「私じゃ力不足なんです」
ガリン「知らないよそんなこと、私は力がない？。だったら努力してでもやれよ。それに、力不足なら誰かに協力を頼めよ。誰かに頼るだけでいいのか？」
黒猫「・・・」
ガリン「俺の言いたいことはそれだけだ。後は自分でなんとかするんだな」
そういって俺は黒猫をその場に残して去った。

そして、数分すると美羽がやられた。
美羽『ごめん、気づかなかった』
どうやら背後から1撃でやられたらしい。
ガリン『マジかよ』
美羽は防御力が低いがそれでも1撃で倒せるなんて思ってもいなかった。
ガリン『どの辺でやられた？』
美羽から場所を聞いた。
ガリン『俺はそこに向かう、小坂はどっちでもいいぞ』
小坂『了解です』
俺は美羽がやられた場所に向かった。
ザン「やぁ、ガリン」
ガリン「ザン・・・」

ザン「君が来たってことは美羽から聞いたのか」
ガリン「あぁ、聞いたよ」
ザン「あいつはもう少しやれる奴だと思ってたがっかりだよ。神である俺に逆らうとはね」
少し、頭にきた。
ガリン「あんたと語ることはない」
俺は再び双剣を取り出す。
ザン「お前は双剣を使うのか」
ガリン「あぁ、この剣であんたを倒す」
ザン「なら、俺は刀だ」
絶と同じ、刀・・・
ザン「まぁ、５０レベル程度に本気をだすってわけじゃないがな」
ザンは俺のレベルが１５０レベルにいってることは知らない。油断している今がチャンス・・・。
ガリン「１００レベルだろうが何レベル離れていようと、お前を倒して神を滅亡させる！」
ザン「今のうちに言いたいことは言っておくんだな！」
ザンが体当たりしてくる。
俺は反応できずに体当たりされる。
そのまま、ザンはスキルを発動する。
スキル：天昇（てんしょう）
刀を抜刀し俺を切りつける。それを剣で止める。ザンは勢いを止めずに俺を上空に飛ばす。
すぐに刀を鞘に収めて攻撃を続ける。
スキル：抜刀－絶
絶が得意とする風の刃で切るという遠距離相手に仕えるスキル。
俺は飛ばされながら風の刃を切った。
あれは・・・
俺は空中で建物の影に隠れている小坂を見た。
ザン「低レベルでも刀の威力じゃすぐには無理か」

地上に降りた俺に向かって大剣を持ったザンが向かってくる。
そう、ザンのメイン武器は大剣なのだ・・・。
大剣の大技が襲ってくる。
スキル：巨人狩り
ザンは俺に向かって大剣をいきよい良く振り下ろした。
このスキルはＳＰを全部使うことで発動する大技。当たれば同じレベルだったら絶対に倒せるくらいの威力が出る。
俺は回避しようとするが動けない。
ザン「終わりだ！ガリン」
やられる！？
そのとき、小坂が俺とザンの間に入ってきた。

第１５章［決戦、神と悪魔］（後書き）

ガリンとザンの間に入ってきた小坂。そして、その思いは一体！？

最終章『神滅』

小坂が俺とザンの間に入り、俺を庇って巨人狩りを受ける。
１撃で小坂のＨＰは０になる。
ガリン「小坂！」
小坂「マスター、逃げないで戦って勝ってください」
ガリン「何いってんだ？俺の戦略は俺がやられることで完成していた！」
俺の作戦は俺を倒したザンが余裕を見せてるときに小坂が罠にかけて終わらせるというものだった。
小坂「だから、逃げないでください。決着は自分でつけてください」
見抜かれていた。俺はザンとの戦いに恐れていた。
だから、小坂に最後を閉めてもらおうとしていた。
長々と話してるとザンが大剣をもう一度振る。
それを回避しながら言った。
ガリン「しかたないな、悪魔（俺）の戦い方で終わらせてやるから、先に休んでろ」
小坂「はぃ」
最後の言葉を言って小坂は消えた。
ザン「雑魚を盾に自分が助かるとはね。さすが悪魔だ」
ガリン「ごちゃごちゃうるさいよ」
ザン「あ？」
ガリン「ギルド員を馬鹿にした。貴様は！だから、俺がお前を倒す」
ザン「たかが１００レベル程度の武具でこの俺は倒せないよ！」
ガリン「じゃ、ここからが本番だ」
武器と防具を一気に変更する。
最初につけていた防具でも、１００レベル程度の防具でもない。
１５０レベルの武具を装備して戦う。
ザン「いつの間にそんなレベルに！」

ガリン「あんたを倒して神を滅亡させる！」
剣と剣を交えながら言う。
ザン「馬鹿め！俺を倒したところで黒猫がいる！それどころか現在は2対1だ！」
ガリン「いや！1対1だ。ここでどちらかが倒れた時点で決着がつく」
スキル：炎刀（エントウ）
自分の剣に炎をまとわせる。
ザン「どっちにしてもお前はここで終わり俺が生き残る！」
スキル：氷刀（ヒョウトウ）
ザンの剣に氷がまとわりつく。
ガリン「［神の判断］はここで終わりだ！」
ザン「消えろ［神滅］、我が理想のために！」
炎と氷の剣は交わりながら相手にダメージを与える。
スキル：連舞
俺は剣を振り回し攻撃する。
スキル：クレイモア
ザンは地面に大剣をたたきつけ地割れをおこす。
俺の足が不安定になりその場に止まる。
ザンはそこに大剣で攻撃しに来る。
ザン「死ね！」
大剣を2つの剣で受け止める。
ガリン「うぁぁー！」
大剣の軌道をずらしてその隙にザンの懐に入って斬る。
ザンはバックステップをしてかすり傷程度のダメージしか受けていない。
バックステップするザンに追撃をしようとすると横から大剣が来る。
剣でガードするが大ダメージを受ける。
スキル：投剣（トウケン）
ザンにめがけて剣を投げる。

それを大剣でガードする。
剣は弾かれて、上空に舞い上がる
回復アイテムを使いながら走って弾かれた剣を取るためジャンプする。
空中で剣をキャッチして、ザンに刃を向けて落下する。
落下する俺をザンは大剣で叩き落とす。
ガリン「ガハ」
やばい、次の攻撃をよけれない！
ザン「これでどうだ！」
スキル：巨人狩り
俺に向かって大剣をいきよいよく振り下ろし止めを刺しにきた。
だが、大剣は俺にあたる直前で止まった。
ザン「な、なんで、お前が？」
見てみると黒猫がザンを剣で刺していた。
黒猫「もうやめて！」
ザン「お前のために俺は、俺は！」
大剣を黒猫にめがけて横に振る。
ガリン「やめろ！」
止めるがザンはとまらなかった。
黒猫は攻撃を直撃してＨＰが０になる。
ガリン「お前・・・」
ザンを見つめる俺。
ザン「黒猫、どうしてだ！お前が作ろうといったギルドを守るために俺はどんなことでもしてきたのに！」
ザンは大剣をその場に落として言った。
ザン「他人をだましてでも金を手に入れて、ギルドを大きくしたのに、どうして俺を裏切った！」
ザンは叫んだ。
黒猫「もういいの・・・。ギルドがどれだけ小さくてもよかったの・・・。悪いことをせずあなた・・・・」

黒猫は消えた。
ザン「どうしてだ。どうしてなんだ！」
ザンの姿をみて言ってしまった。
ガリン「愚かな・・・」
ザン「なんだと・・・」
大剣を拾い上げ言う。
ザン「そうだ、お前が悪いんだ・・・。お前が来たせいであいつがおかしくなった！」
ガリン「悲しみを抑えるために他人のせいにするのか！」
ザン「貴様さえいなければ！」
ガリン「なら、いいよ。滅亡させてやるよ！黒き神よ！」
スキル：煉獄
２つの剣を真っ赤に燃え上がらせて、強烈な一撃を敵に叩き込む。
スキル：巨人狩り
いきよいよく大剣が振り下ろされる。
・・・
俺の剣はザンの体を貫いた。
一方、ザンの大剣は俺のすぐ横に振り下ろされていた。
ザンは倒れた。
『勝者！［神滅］』
アナウンスが流れた。

決闘場から待機室にワープすると
絶と美羽「「ガリン！」」小坂「マスター！」
絶と美羽と小坂が俺の帰りを待っててくれた。
ガリン「さぁ、俺たちの勝ちだ！」
全員に向かって言った。
喜び合う４人、その姿をみているザン。
黒猫「お疲れ様、ザン」
ザン「黒猫・・・」

黒猫「残念な結果だったけど、これでよかったと思うよ」
ザン「なんでだ。なんで俺を裏切った」
ザンは叫んだ。
それを聞いて俺たち４人も静まる。
沈黙の中
黒猫「ごめんね・・・」
力のない声が聞こえた。
黒猫「戻ってほしかったの・・・。昔の、やさしかったザンに・・・。どんなに小さなギルドでも、やさしかったザンがいてくれれば善かったんだよ・・・」
ザン「俺が、俺がだめだったのか・・・。俺のせいで・・・」
黒猫「いいの、何もいえなかった私も悪いの・・・」
その場に座り込む２人、その２人に俺はつらいことを言わなければならなかった。
闇ギルドの『神滅』のギルドマスターとして、
ガリン「二人には悪いが、約束どおり。ギルドは解散してもらうぞ」
小坂「マスター、なにもここで言わなくても・・・」
小坂が言った。
ザン「いいや・・・。約束は約束だもんな・・・」
ザンが言った。
ザン「これをもってギルド『神の判断』は解散するよ」
黒猫「ザン・・・」
つらそうなザンを見つめる黒猫。
その場でギルド解散手続きをするザン。
これによってギルド『神の判断』はなくなった。
ガリン「これでいい」
俺は最後まで悪人にならなきゃいけなかった。
ザン「ごめんな、ギルドをなくしてしまって」
黒猫「いいの・・・」
２人が話し合ってた。

ガリン「はぁ」
俺はため息をついた。
ガリン「約束はこれで終了だ。これから新たにギルド作るなり2人でがんばれよ」
全員「「「「「え！？」」」」」
その場にいた俺以外の人が言った。
ガリン「約束は解散することまでだ。解散したあとお前らが何してても俺は知らない」
ザン「じゃ、じゃ・・・」
ガリン「勝手にギルドでも作って楽しんでるんだな」
ザンと黒猫「「ありがとう・・・」」
二人は言った。
ガリン「馬鹿か？俺は悪人だ。悪人にお礼を言うな」
美羽『これでいいの？』
美羽がギルドチャットで聞いた。
ガリン『あぁ、これでいい。この2人なら闇ギルドがもう一度できることはないだろ』
美羽『そっか・・・』
絶「そういえば、クロウは？」
絶がきになって聞いた。
ザン「そういえば、次こそ勝つとかいって狩場にいったよ・・・」
絶「どっちも負けないのが答えじゃなかったのかよ・・・」
ガリン「大変だな絶も」
絶「あぁ・・・」
ザン「そういえば4人はどうするんだ？これから」
ザンが聞いてきた。
ザン「なんだったら俺のギルドに・・・」
ガリン「俺はよ。暗いと眠れないんだよ」
ザン「？」
いきなりのことに疑問を浮かべるザン。

ガリン「だから、闇ギルドがあると眠れないくてよ。闇ギルドをなくなるまで神滅をやり続けなきゃいけない。まぁ、ほかの3人がどうするかは知らないがな」
小坂「俺はついていくよ」
っと小坂。
美羽「じゃ、私も行こうか」
っと美羽。
絶「強敵と戦いたいからな」
っと絶。
ガリン「って、ことだ」
全員が神滅に残った。
ザン「まぁ、何かあったら言ってくれよ」
ガリン「あぁ、わかった」
そして、『神の判断』はなくなりギルド『愚かな罪人』っとして2人は楽しく過ごした。
「なにも、そんなギルド名にしなくても」っと言ったが「これでいいんだ」っといわれたら何も言い返せない。

そして、闇ギルド『神滅』の存在はほぼ全ギルドに知れ渡り。
不幸を持ってくるギルドとされていた中、
一部の人には救いをくれるギルドともされていた。
なかでも俺、美羽、絶には三英雄と呼ばれ
悪魔、女神、英雄っという2つ名までできた。

この物語を知ったオンラインゲームプレイヤーに問う。
『あなたのギルドは闇ギルドじゃありませんか？』

最終章『神滅』（後書き）

※この物語はあるオンラインゲームで実際にあったことを元に書かれています。
もしかしたらあなたの近くに神滅がいるのかも知れません。

3／6　この小説の続編『神滅』が書き始めました。
お暇な方はどうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3526i/

仮想世界「仮想オンラインゲーム」

2010年10月10日12時42分発行